

男が泣く日本文学の系譜を探って

——男主人公が最も泣く『夜の寢覚』——

安部清哉・菊池そのみ

プロローグ

「そう思うとね、急に涙が出てきた。泣いたのは本当に久し振りだった」(村上春樹『風の歌を聴け』)(下線は引用者、以下同じ)

「僕は川に沿って河口まで歩き、最後に残された五十メートルの砂浜に腰を下ろし、二時間泣いた。そんなに泣いたのは生まれてはじめてだった。二時間泣いてからやっと立ち上ることができた」(村上春樹『羊をめぐる冒険(下)』)

「しかしやがて潮は引き、僕は一人で砂浜に残されていた。僕は無力でどこにも行けず、哀しみが深い闇となって僕を包んでいた。そんなとき、僕はよく一人で泣いた。泣くというよりはまるで汗みたいに涙がぼろぼろとひとりでにこぼれ落ちてくるのだ。」(村上春樹『ノルウェイの森(下)』)

「目を閉じて身体の力を抜き、こわばった筋肉を緩める。列車のたてる単調な音に耳をすませる。ほとんどなんの予告もなく、涙が一筋流れる」(村上春樹『海辺のカフカ(下)』)

男、がよく泣く。文学の中で、男が泣く場面を読んでも、私たちは、現実の場面では異なり、あまり違和感を感じない。むしろ時に不思議な共感さえともなって作品の中へと感情移入していく感覚を覚える。これら村上作品の場面でのように……

もちろん、泣く場面や泣き方にもよるのであるが、少なくとも、あまりマイナスな印象を(理由もなく、あるいは、直ちには)持たない、ようである。「日本」では、特にそうらしい。それが、村上春樹の作品の中だったりすると、特にそれはいっそう顕著でもある(あまり文学作品では男が泣かないと言われる西欧では(後述)、村上作品の男主人公の「涙」は、どう受け取られているのだろうか?)。

「村上春樹の小説の主人公や大切な登場人物は重要な場面でよく泣きます。大粒の

(58)

涙をこぼして泣くのです。」<http://www.fukuishimbun.co.jp/sp/nationalnews/EN/culture/450075.html?RP=s> (2015年9月26日時点)

村上作品では、女性も同じように泣くのではあるが、日本の文学では、男が実によく泣くことは以前から知られている(丸谷才一、後述)。

さらに、単に男がよく泣く、というだけでなく、最もよく(頻繁に、あるいは、極めて目立つ場面で)泣くのが男の方である、ということもある。女性、特に女主人公ないし主人公クラスの女性を恋い慕って泣いているのが、作品の「男主人公」であるということが、まま見られる。それは、“女を思慕して泣く男”なのであるが、それに対しては、決して“女々しい”というだけの受け取り方や評価をしていない、らしい。近い時代の作品では、例えば、田山花袋の『蒲団』の場合を、思い出していただくのでも、とりあえずは、間に合うだろう。

「夜着の襟の天鷲絨ねりびろうど きわだの際立って汚れているのに顔を押し付けて、心のゆくばかりなつかしい女の匂いかを嗅いだ。

性欲と悲哀と絶望とが 忽たちまち時雄の胸を襲った。時雄はその蒲団を敷き、夜着をかけ、冷めたい汚れた天鷲絨の襟に顔を埋めて泣いた。」——「蒲団・重右衛門の最後」新潮文庫

丸谷才一は、「男泣きについての文学論」(1983.2)でつとに、日本文学では西欧文学とは異なり、「男」がよく泣くことを、多くの作品を挙げて指摘し、解説している。

そのくらい特徴的で目立つから、高校生(?)の感覚からも——高校でよく読まされる古典作品が『源氏』や『伊勢物語』等の男女の恋物語などに偏ることもあって——素朴にも以下のように、揶揄するかのようになさえ、言われてしまうことになる。

「日本の古典文学に登場する男性は、どうして泣いてばかりいるのか?——

馬鹿なんじゃないのか? 昔、受験生だった頃に、古文というくだらない科目を仕方なく勉強しておりました。その際に、疑問に思ったのが、「どうしてこいつら、すぐ泣くの?」ということです。(略)彼らって馬鹿なの? 死ぬの?」

http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q12120697162 (YAHOO知恵袋での質問、2015年9月26日時点)

男が泣く、ということでは、その文学の用例を丸谷も古典作品からいくつか挙げている。特に、恋う女性を思慕して泣く初期の例は、「我妻はや」と泣く(嘆く)日本武尊であろうか。

「時日本武尊、每有顧弟橘媛之情、故登碓日嶺、而東南望之三歎曰「吾孀者耶。(孀、此云菟摩)」故因號山東諸國、曰吾孀國也。」(日本書紀卷、第七、景行天皇)

では、作品の最重要人物である男主人公が、作中で最も頻繁に泣いている文学の最初は何であろうか。そのような細かな条件については、丸谷は特にこだわっていない。主

人公の男を、泣きに泣かせても話が展開していく日本文学の最初のもは何であろうか。それは、どうも『源氏物語』らしいのである。

そして、そのように男主人公が一番泣いていても（作品として評価を得て）受容されていくような文芸的伝統は、平安後期の『夜の寝覚』『浜松中納言物語』によって、受け継がれることで、日本文芸史の中に定着することになっていくらしいのである。

つまり、『源氏』の、時に垂流作品ともされるこれらの作品が、男主人公が女性を思慕して泣くといういわば美質を引き継ぎ、男が泣く日本文学をさらに深めていったらしいことが見えてくる。

『源氏物語』で、光源氏が泣くことは既によく知られているが、長編という分量の中では、最も多く泣いているという特徴は埋没してあまり気づかれていない。源氏に比べれば、長さの短い『寝覚』『浜松』では、男主人公の用例が目立ちやすく、それゆえ、『浜松』ではすでに詳しい考察が（その作品内部のみの問題としてではあるが）なされ注目されてもいるのである。

本稿が考察してみたいと考えているのは、この「男主人公が最も多く泣く」日本の文学作品の系譜としての『寝覚』の、男主人公が泣く表現である。

このテーマはさらに関連して、『源氏』との比較、『浜松』との比較、同じ平安後期三大長編作品としての『狭衣』との比較、くわえて、『源氏』において主人公が多く泣くのはなぜなのか、紫式部はどこからどのように、この創作の着想を得て主人公の男が泣く場面を多く設定することにしたのか、などが課題となってこよう。

それらの発展的課題もあるが、ひとまず、本稿が目的とするのは、以下の点である。

○男主人公が最もよく泣く文芸の系譜の1つとしての『寝覚』の位置

○源氏を受け継いだ『寝覚』での特徴

○同じ系譜に属し、作者が同じという説もなおある『浜松』との、男主人公の泣き方の比較

本稿では、ひとまず上記のように『寝覚』の問題に焦点を絞り、「泣く」「涙」類の表現を、文学的考察というよりは、むしろ客観的に表現の問題として日本語学的に分類・整理し、分析することに焦点を当てて考察してみたい。（他の問題は、今後の課題としておくことにしたい。）

1. はじめに

「男泣き」という言葉にどのようなイメージを抱くだろうか。今日では男性が涙を流すことはかっこ悪いとか、なよなよしているといった感覚があるのではないだろうか。しかし、かつての日本では男が人前で泣くことは決して否定されるようなことではなかった。

丸谷才一は「男泣きについての文学論」（1983.2）の中で、涙を流すというのは、言

(60)

葉にできない感情を表現するための方法および呪術的表現だと述べている。人々が、自分の思いや感情を積極的に言葉にできるようになり、また同時に、呪術的な信仰を涙に込める習慣を忘れだしたことで、今日の人々は涙を流す回数が圧倒的に減ってしまったということになる。そしていつの間にか、「男泣き」という語があるように、泣くことにはある種特別な性差の偏見が生まれたのである。

日本の「男泣き」のはじめは、『古事記』上巻のササノヲノミコトの涙、次に中巻のヤマトタケルノミコト、と丸谷は指摘する。

続く平安文学において、男が泣く場面は、『竹取物語』『古今和歌集』ほかにも多く見られるのは、丸谷氏も挙げているとおりである。より詳しく見てみると、単に泣くということだけでなく、『源氏物語』の男主人公・光源氏が、とにかくよく泣いていることに気付く。例えば、桐壺巻～朝顔巻において、動詞「泣く」は53例中15例が光源氏の行為、同じく名詞「涙」は62例中20例が光源氏の涙で、どちらも他の登場人物と比べて最も多い値となっている（『源氏』において、泣く回数的高低を比較し問題にした論はまだ見出せなかった）。

そして、次に、その特徴が見られるのは、『源氏』の巫流とも言われてその特性を全編にわたり受け継いだ、『夜の寝覚』、『浜松中納言物語』、という、平安後期長編物語である。

『浜松中納言物語』でも、男主人公はよく泣く。「泣く」と「涙」の総計173例のうち71例が男主人公中納言が流した涙であり、次に用例の多い、女主人公吉野の姫君が27例であるのに比べても圧倒的に泣いていることが分かる（数値は今泉雅代（1983.3）「平安末期の涙考——浜松中納言物語を中心に——」による）。

本稿は、「男主人公を泣かせる文芸の系譜」が、『寝覚』ではどのように受け継がれ、文芸的魅力の1つとなっていたのか、その表現の特性を記述的に報告するものである。

具体的には、『夜の寝覚』における「泣く」類、「涙」類ごとに「泣く」表現の全例を取り上げ詳細に分析する。それらについて、その主体、対象、場面ごとに考察し、また、その時の主体（泣いている人）の感情を、悲哀・悲嘆、苦悩、女君への思慕などに分類して傾向を探る。泣く類（「泣く泣く」等の派生語）、涙類（「涙」および関連表現）での表現の相違を比較し、また、「泣く」表現が現れる文章中の位置からその特性を見る。また、多く見られる共起表現「あはれ」との関係も考察する。これらを通して、『寝覚』における男主人公の「泣く」表現の特性を考察してみたい。

なお、以下、本文での説明では『源氏』『寝覚』『浜松』と略記していくことにする。

2. 先行研究

『夜の寝覚』における涙の研究には、鈴木貴子氏（2011.3）「『夜の寝覚』における〈涙〉の表象——石山の姫君の「家族」——」がある。鈴木氏は、涙することが非常に少ない

石山の姫君に焦点を当て、幼い彼女とその家族を取り巻く物語として、論を展開されている。用例数に関しては、『寢覚』の中で、男君の〈涙〉が最も多く、次いで女君の〈涙〉が多いという。また、女君は「中の君」の時（巻1、2）よりも「寢覚の上」になった後（巻3以降）の方が、以前の2倍も泣いているという。

今泉雅代氏（1983.3）「平安末期物語の涙考——浜松中納言物語を中心に——」では、「ナミダ」の語源論から始まり、『浜松』において、「涙」を流して「泣く」場面の関する細かい考察がなされている。さらに、「もののあはれ」と関連させ、平安後期作品の特徴まで言及している。しかしながら、『寢覚』の男君の涙に限定して行われた研究はこれまでにない。

なお、「泣く」・「涙」と直接は関わらないが、男君の性格や特徴に関して、永井和子氏（1990.9）『続 夜の寢覚物語の研究』や宮下雅恵氏（2011.5）『夜の寢覚論〈奉仕〉する源氏物語』によって、光源氏を目指した理想性を持ちつつ、女君の心を推し量ろうとする点、内省的で自分の中で納得をうけようとする「ことわり」の精神を持っている点が指摘されている。

これらの中でも、特に『浜松』について考察した今泉氏の論が、本稿と密接に関わっており、今泉氏の分析観点も参考とさせていただいた。以下でも、『寢覚』と『浜松』とを比較しつつ見ていくことにする。

3. 『夜の寢覚』における涙

まずはじめに、動詞「泣く」に関連する用例、および、名詞「涙」に関連する用例をすべて抜き出して分類し、傾向を見るところからはじめてみた。表1以下のものがその結果である。なお、調査対象とした関連語彙は次のものである。以下、順に考察していくことにする。

泣く語彙：泣く、泣く泣く、泣きみ笑ひみ、泣きみ、喜び泣き、泣き笑ふ

涙語彙：涙、涙ぐむ、涙ぐまし、涙ぐましげ

まず、使用例数から確認する。【表1】には、『寢覚』における動詞「泣く」の用例数を、主体人物および巻別に示した。この「泣く」60例は、『夜の寢覚総索引』（阪倉篤義ほか編、明治書院、1974.9）での次の例数の合計である。「なきい・る〔泣入〕」1例、「なきうら・む〔泣恨〕」1例、「なきこが・る〔泣焦〕」1例、「なきしず・む〔泣沈〕」1例、「なきののし・る〔泣罵〕」1例、「なきまど・ふ〔泣惑〕」2例、「なく〔泣〕」53例、計60例。なお、「なきわら・ふ〔泣笑〕」のみ、表6で処理した。【表2】にあげた副詞「泣く泣く」23例は同じく総索引の「なくなく〔泣々〕」23例、【表3】にあげた「涙」82例は同じく総索引の「なみだ〔泪・涙〕」82例すべてを対象とした。【表4】動詞「涙ぐむ」12例については、総索引では「なみだぐ・む〔泪含・涙含〕」13例であるが、「※391③」は底本では「なみたみて」（主体は右大臣＝中納言）であるので、除外し12例とした。【表

(62)

5】形容詞「涙ぐまし」7例は総索引「なみだぐま・し〔泪含・涙含〕」7例を対象とした。また、【表6】には「泣く」の類義語、「泣きみ笑ひみ」、「泣きみ」、「喜び泣き」、「泣き笑ふ」と、形容動詞「涙ぐましげ」の各語の巻別用例数を提示し、()内に主体人物を記した。ここも同様に、総索引の「なきみわらひみ〔泣笑〕」2例、「なきみ〔泣〕」1例、「なきわら・ふ〔泣笑〕」1例、「よろこびなき〔喜泣〕」2例、「なみだぐましげ・なり〔泪含・涙含〕」1例を対象とした。

【表1】～【表5】を見ると、男君（中納言、大納言、内大臣と名称変化）が作品中でよく泣いていることが分かる。物語主人公の女君（中の君、寢覚の上と名称変化）を上回り、他の登場人物に比べても圧倒的に涙する場面が多いようである。

また、巻別に見ると、「泣く」は巻2、「涙」は巻1で多く見られる。ただ、主体人物を見てみると、巻2での「泣く」が多くの人物が涙を流した結果であるのに対して、巻1の「涙」はその半数以上が男君ひとりで流した涙であり、その他に涙した人物も限られていることは考慮しなければならない。物語の展開を考えると、まず、女君を垣間見し、その素性を勘違いしながら恋に落ちた男君の思慕の感情が大きく描かれる。契りを交わした二人は、義兄妹という間柄だったという事を知り、その涙は苦悩や悲哀の感情によって流される。また身重な身体になっていく女君を取り巻く人々は、さまざまな思いから涙を流しているのだ。

それでも、やはり男君の泣きっぷりは目を見張るものがある。また、女君の父（父大臣）もよく泣いており、いわゆる「男泣き」が用例数の多くを占める。

しかし、ヒロイン女君が泣いていないのかというと、そういうわけでもない。用例数でいえば、「泣く」、「涙」「涙ぐむ」「涙ぐまし」は男君に次いで多い。また、巻による偏りも小さい印象を受ける。

特徴的なのは、巻3である。この巻では、女君と帝以外の人物はほとんど泣かないストーリー展開となっている。涙表現は物語と非常に密接に関係しており、巻3は、帝と女君の関係が中心に描かれているため、前半部であんなに涙していた男君さえ、泣く場面がほとんどないのである。次の章では、男君の涙に注目し、その多涙性を探っていくたい。

4. 男君の涙——女君を思って泣く姿——

続いて、作品中で最も多くの涙を流している男君が「涙」したり、「泣く」場面に焦点を絞り、考察を行っていきたい。ここでは、その涙が流された理由や、「誰に」あるいは「何に」対して流されたものなのか、という点に注目していく。

【表7】に男君が涙を流す表現について、その原因と対象を示した（ここでは「泣く」、「涙」など、語単位での区別を行っていない）。

原因とは、涙の理由、およびその時の男君の心理・感情を指し、その内容によって、今泉氏の論文を参考として次の14項目に分類した(①の思慕をさらに2つに分けている)。

①思慕 a (愛しさ)、思慕 b (悲しさ)、②心配、③苦悩、④悲哀・悲嘆、⑤喜び、⑥後悔、⑦同情、⑧安堵、⑨不吉、⑩未練、⑪感動、⑫賞讃、⑬その他

①思慕は、愛しさがより強い場合を a、悲しさがより強い場合を b とし、2項目に分けた。また、「泣きみ笑ひみ」(泣いたり笑ったり)など、感情が読み取れないものと、複数の感情を抱いて泣いている場合をその他とした。なお、【表7】の巻4に※とした項目があるが、ここは、男君が女君の気持ちを勝手に推測し、先取りして涙を流しているという特殊な場面であり、対象が特定できないと判断したためこのように処理した。

紙幅の都合があるので、以下に用例の多い①～④から各一例を参考までにあげておく。大系本における原文表記を示す振り仮名は特に理解に影響ない限り略した。また該当箇所を下線を付した。

用例1 〈①思慕 a (愛しさ)〉

「されば、さやうに言ひかへすべくもあらず。たれとはなく、ゆくりなきほどの事とはいひながら、秋の風に吹みだる刈萱のうへの露みだれちりつらん氣色したりつるこそ」らうたさはまづ思出でらるゝに、なみだぐまれて、「さてへ」といたく聞きとゞめてとひ給。「そののち影ならべんの氣色ありや。ならべやし給ひし」と(巻1・旧大系本65ページ)

用例2 〈①思慕 b (悲しさ)〉

殿の御方にも參給はで、つくへと臥して見給へば、かたみの衣は、裏も表も、ふくよかにて、たゞありつる人の香にて、なつかしく染みかへりたる袖を、顔におしあてて泣き給つゝ、「なくもなりなば、こればかりを形見にてこそは、世をそむき、ふかき山にも跡を絶ため。(巻2・旧体系本128ページ)

用例3 〈③苦悩)〉

こなたは、人の御程いとやんごとなく、かたじけなきもおろかならず、かれはた、年ごろ思まどひ、心をつくししに、にはかにひまある時の、いかでよろしからざらん。さもくるしき心のうちかな」とうちなげかれつゝ、身にそふ魂もなき心地に、大皇の宮の、かくよりおはしまして、つきせず泣きうらみさせ給御ことば、まねびやるかたなければ、たゞうちかしまりて聞きみ給へり。(巻4・旧体系本301ページ)

用例4 〈④悲哀・悲嘆)〉

「あはれや。きのふの御氣色、さばかり心ぐるしげなりしを、いま一度見せ奉らでや。さりげなくて、おぼつかなく思しぬべき御氣色なめるを」といふに、大納言もしばしつゝ居給て、なき給ふ。(巻2・旧体系本141ページ)

用例1は(女君の)「可憐さがまづ思い出されるにつけ、涙ぐまれて」(全集本訳)と、

(64)

愛らしさが強調されるが、用例2は、女君と交換してきた形見の着物が、女君の香りそのまま、懐かしく、顔に押しあてて涙に暮れて、あの人死んでしまったら、この着物をただ一つの形見として出家をしようと思うと、女君への思慕に会えない悲しみが色濃く表現されていると言える。このように、前後の文脈から、思慕のうちで愛しさがより強いと判断したものをa、悲しみが強いと判断したものをbとした。また、用例3は、長い間恋い焦がれてきた女君とようやく逢えるようになったものの、自らのもとに娶った女一の宮（帝の妹宮であり、身分が高くおろそかにできない）への恋心に揺れ、たいそう心苦しいものだと涙を流す場面である。用例4は、対の君が、娘である石山の姫君と引き離されている女君の心情を、さぞつらいだろうと心配して話した言葉を聞いていた男君は、母子とともに暮らすことのできない現状に涙を流すという場面。用例3のように、自分の感情などにおいて、どうにかしなければならぬ、あるいはどうにかなりそうではない事柄について涙を流している場合は③苦悩、どうにもならないことへの用例4に表わされるような涙は④悲哀・悲嘆と分類した。

今泉氏も同様のことを述べているが、思慕と悲哀・悲嘆、また悲哀・悲嘆と苦悩はその感情を必ずしもどちらかと言いつけるものではない。今回は、この点を考慮しつつ前後の文脈を読み取って①～⑫の観点で分類を行なった。

表の総計を見ると、④悲哀・悲嘆が最も多く、次いで③苦悩が多い。①思慕aとbをひとまとめにしてみると、14例となり、③苦悩と同数である。また、対象に関しては、女君に流される涙が巻1～巻5で計44例であり、全体67例のうちの65%に上ることが分かる。後半になるにつれて、涙の原因はより多様性を増してくる。特に巻5では出家を志す女君への未練の涙（⑩）が3例見られるという特徴がある。

女君との恋に対する、悲しみや苦悩によって多くの涙を流す男君の姿が浮かび上がってくる。そして、思慕に表れる強い思いは、物語を通して女君にしか流されない特別な涙である。男君は巻3で女一の宮をめとっており、巻4で、彼女にも心惹かれ、女君と女一の宮の間で苦悩する姿が描かれている。しかし、女一の宮に対して恋い慕って流れる涙は存在しない。愛しさと悲しさ、離れているようで近い距離にある、この二つの感情が思慕の涙としてひたすら、女君だけに流される。それがこの作品の涙表現において核をなしていると言えるのではない。

5. 涙の原因とその表現

次に、男君の涙の原因が、「泣く」や「涙」を使った表現方法とどのような関係があるのか見ていくことにする。【表7】では涙の原因と対象を見たが、【表8】では原因と表現に関連があるかをまとめた。ここで、以下のように「泣く類」と「涙類」の分類を行った。

泣く類	泣く、泣く泣く、泣きみ笑ひみ、泣きみ、喜び泣き、泣き笑ふ
涙類	涙、涙ぐむ、涙ぐまし、涙ぐましげ

【表8】において、①～⑫、その他の原因によって流される涙が泣く類、涙類のどちらであるかということに注目すると、①思慕と③苦悩は圧倒的に涙類が多いことが分かる。しかし④悲哀・悲嘆は泣く類のほうが多い。また、用例は多くないが、泣く類でしか表現されていないのは⑤喜び、⑥後悔、涙類でしか表現されていないのは①思慕 a、⑧安堵、⑨不吉、⑫賞讃である。

6. 「泣く」「涙」表現の現れる位置

【表9】に、男君が涙を流す場面において、泣く類、涙類それぞれがあらわれる位置について示した。挿入句とはかぎ括弧「」で括られた、会話および心内語部分のことである。今泉氏の分類には、「挿入句の後」、「歌の前」、「歌の中」、「歌の後」、「歌を聞いた他人」の5項目であったが、今回は「挿入句の前」、「挿入句の中」、「挿入句と歌の間」の3項目を追加し、分類を行った。その位置関係を以下にまとめた。

挿入句の前	「挿入句の中」	挿入句の後
歌の前	歌の中	歌の後
挿入句と歌の間＝「挿入句」＋（泣く・涙）＋歌		

用例5 〈挿入句の後〉

「幼くより、とりわきてたのみきこゆるしるし、この折なむ見るべく侍。いまはいとゞしたしく、あはれになむ思ひきこゆる」とのたまふまゝに涙ぐみて、ふかく思しいれたる氣色、僧都もいみじくあはれと見きこゆ。(巻1・旧体系本98ページ)

用例6 〈挿入句の後〉

「この世には、つらかりける御契を、今ひとたび見奉(みたてまつ)らん」と、なくのたまふ。(巻2・旧体系本124ページ)

用例7 〈挿入句の後〉

「あが君や、などかくつらう、いみじき契はおはしける。もの覺えてのち、めぐらひ侍に、心にのこる事もなく、思なやむ事なかりつ。いかなる契にかありけむ、ひと目見奉りてしのち、心魂もしづまるときなく、夜は、つゆまどろむ時なくなげき明し、晝は、ひぐらし思ひくらすよりほかの事もおぼえざりつるに、終に例のさまにて、いまひとたび對面せでわかれ奉りなば、かたとき、たち後れてあるべきにもあらず。よし、人も見聞き給へ。われも人も、はかなかりける世を、た

づね聞き奉りても、あぢきなく人目をつゝみはかりて、などてすごしつらむ。心のまゝに亂れたちてこそ、いづくへも率て奉るべかりけれ」と、言ひつゞけて泣き給ふ氣色の、心ふかう堪えがたげなるを、中將も、いとかなしく、つくへと聞きて、(巻2・旧体系本126ページ)

用例8〈挿入句の前〉

こまかにうち解け見るまゝに、心におのみ染みまさりて、ほろへとうち泣かれて、「さも、よろづに思しはなつ言葉のみつきせぬかな」と、うらみも契も、たち／離るべきかたなく言ひつくして、からうじて宮の御方にわたり給へる。(巻5・旧体系本374ページ)

用例9〈挿入句中〉

「むべなりけり」、『聲も涙も』とのたまひし御氣色をあやしと思ひしは。かくなりけりと、思ひよらず、よそに思ひけるよ」と、うちまもるに、(巻1・旧体系本113ページ)

用例10〈挿入句と挿入句の間〉

御文にては、ふでのゆくかぎりあれば、きこえつくしやるべきかたなし。みづからあきらめんと思ふには、たえていで給はず、いとゞ心憂ければ、うち泣ひ給て、「さばかりたぐひなかりし人にたぐひても、我をばなを思しはなはず、さがたき物に思ひとゞめ給へりしをりへのことば、『かゝるもとゐ、あいなし』と、かけはなれ給たりしかど、(巻4・旧体系本321ページ)

【表9】を見ると、挿入句の前後にあらわれることが多く、「涙」が多く使われていると言える。巻1、巻2では、用例5～7のように、挿入句の後で「のたまふ」「言ふ」と共起する例が見られる。しかし、巻4、巻5ではこの表現はほとんど見られなくなり、巻5に1例、「…」とのたまふままに涙落としたまふ」があるのみとなる。巻4、巻5では特定の偏りが見られなくなり、巻1、巻2よりもさまざまなパターンがある。また、男君の歌の中で見られる「涙」は物語の前半部に集中していることも分かる。用例8は挿入句の前に現れる例、用例10は挿入句と挿入句の間に現れる例である。また、用例9に示したが、挿入句の中に一例のみある「涙」は、この場面よりも前に男君が自ら詠んだ歌(「我がごとや花のあたりにうぐひすの声も涙も忍びわびぬる)の一部分が会話内に挿入されている。

副詞「泣く泣く」は挿入句の前に置かれやすいこともわかる。挿入句の前後に、涙を流したり、泣きながらという表現を置くことで、感情の強さがにじみでている。

今泉雅代(1983.3)「平安末期物語の涙考—浜松中納言物語を中心に—」では、動詞「泣く」が付される位置についての記述がある。【表10】にその数値をまとめた。『浜松』では歌の後の涙が多い点が『寝覚』と大きく違う。(今回の【表9】は男君の涙のみの数値であるが、全体を通して、歌の後に置かれる涙表現は泣く類1例、涙類1例の計2

例である。)

7. 「あはれ」との共起

文章中の「泣く」「涙」表現が現れる位置というのは、作品自体の特徴を掴む上でも、また物語の展開に与える「涙」の役割を理解する上でも、重要なポイントと考えられる。今泉氏が『浜松』について検討されている観点を参考に分析し、比較してみたい。

また、今泉氏も注目しているところではあるが、涙の表現と共起する語として注目されるのは「あはれ」である（ここでは、名詞、感動詞の「あはれ」、形容動詞の「あはれなり」「あはれげなり」を含んでいる）。『寢覚』の男君の涙表現では、泣く類との共起4例（巻2に1例、巻4に1例、巻5に2例）、涙類との共起13例（巻1に4例、巻2に6例、巻4に1例、巻5に2例）、計17例であった。男君の「泣く」「涙」表現の計64例中（表6を除く）の17例（27%）、約3割程の出現率である。次に、1、2用例を挙げてみたい。

用例11

「宮の中將のいひしやうに、ふかき山の麓、さびしき蓬葎のしたより、ありし月影を見つけたらば、げにいみじき山人の女といふとも、くるしかるべきやうもなく、心のひくにまかせても、もてなし迎へよせてむかし。命つきぬばかりに戀しく あはれなる に、たゞうちつがひゆきずりさべき勢ひたるが、わびしくもあるかな」と思ひつゞけ、なみだを落しつゞ、交野の萩原よりもすぎわび給ひて、おぼしわづらひ給ふ。（巻1・旧体系本69ページ）

用例12

「やつし奉らん」と思しよらせ給けるにやとも、御氣色たまはらまほしう侍てなん」と、かきくづし、うち泣きうち泣き聞え給氣色の、心ふかう あはれげなる に、入道殿、すべてすべて目も口もひとつになる心地し給て、あさましきに、とばかり物もいはれ給（たま）はず。（巻5・旧体系本343ページ）

用例11では、女君への愛情を、「命も尽きてしまいそうに恋しく、いとしい」（全集本訳）と表現するために「あはれなり」を用い、そのような強い思いから思慕の涙を流す男君の姿が描かれている。また、用例12では、女君が出家することへの未練に思いが溢れ、「泣き泣き言葉を続けられる内大臣の様子が、いかにも心がこもり悲しげな」（全集本訳）様子を効果的に表現している。

このように、「あはれ」が悲しさや愛しさなど、男君の感情をより強調させる役割を持っていることが分かる。「あはれ」が涙表現の前後に置かれることで、その感情がより強調されていると思われるが、その点は『浜松』（今泉氏の論）とも共通している特徴と認められる。

8. まとめ

本稿では、『夜の寝覚』の「泣く」「涙」表現を『浜松』とも比較しながら分析した。

『夜の寝覚』において、男君は女君に対して非常によく泣いている。その涙は、思慕、悲哀・悲嘆、苦悩といった感情に伴って流されており、また、その表現も多様である。涙表現は、会話や心内語の前後に用いられることが多く、涙を伴った行為が多いことも分かる。また、「あはれ」との共起も指摘できる。これらの語は、悲哀や苦悩の感情を強調しており、男君と女君の恋が涙なしには展開されないという作品の進行に影響を与えているといえよう。

男君がなぜここまでよく泣くのか。男が女を思って泣くという構図は、『源氏物語』、『浜松中納言物語』と同様の形式である。男主人公→女主人公という感情の形式がこの涙表現によって表される。『源氏物語』をはじめ、他の平安文学作品との比較を行うことでさらに「男泣き」の理由が見えてくるだろう。

また、女君をはじめ、男君以外の登場人物の涙表現や、「泣く」「涙」の表現を使わない涙の描写に関しても検討の余地があるが、それらについては今後の課題としたい。

本稿では、感情と強い関わりを持つ涙の表現は、「あはれ」との共起が多いことを、改めて確認した（『浜松』でも同様であった）。「あはれ」という感覚が、「泣く」「涙」として現れる程の、悲しさ・愛しさの感情とも強く結び付いて機能していることが指摘できた。

そのことから解釈すると、男の主人公を敢えて多く泣かせることは、この平安的「あはれ」を主人公にもその場面にも強く印象付けることにもなったであろう。それは、作品の魅力ともなる効果があったものと考えられる。

男主人公が、思慕する女性を強く心に描いて「泣く」様は、古く「吾妻はや」と嘆く日本神話の大和尊命などに始まるが、それは、この日本文芸における「あはれ」の世界を読者に喚起する効果もあったと解釈してみた。

村上春樹文学で、男主人公が重要な場面でよく「泣く」ことは、広く知られている。また、多くのファンに印象深いシーンとしても記憶されているのであるが、そこに日本人が強い魅力を感じているのは、この涙が感じさせる独特の日本の情感を、現代的な感覚の中において、我々も感じ取っているからなのかもしれない。

なお、『源氏』における男性の多涙表現の背景について、最後に少し触れておく。『源氏』での引き歌の多用にも現れているように、そこには、『源氏』の歌物語的表現が関わっているのではないかと、思われる。即ち、それ以前の勅撰集を見てもわかるように、和歌の世界では（修辞としてではあるが）、「袖を絞り、枕を濡らす」などの「泣く」表現

が既に男女を問わず、歌の主題のように多く詠まれ続けていた。その和歌的世界における泣く表現を、多くの和歌や引き歌のように、その物語世界に巧みに汲み入れたことが、『源氏物語』での特徴的設定となって現れているように、見えるのである。

初夏の風を受け、柳の枝は柔らかく揺れ続けていた。木野の内奥にある暗い小さな一室で、誰かの温かい手が彼の手に向けて伸ばされ、重ねられようとしていた。木野は深く目を閉じたまま、その肌の温もりを思い、柔らかな厚みを思った。それは彼が長いあいだ忘れていたものだった。ずいぶん長いあいだ彼から隔てられていたものだった。そう、おれは傷ついている、それもとても深く。木野は自らに向かってそう言った。そして涙を流した。その暗く静かな部屋の中で。

そのあいだも雨は中断なく、冷ややかに世界を濡らしていた。

(村上春樹「木野」『女のいない男たち』より)

【表1】「泣く」用例数

	巻1	巻2	巻3	巻4	巻5	計
男君(中納言)	0	6	0	3	4	13
女君(中の君)	3	0	3	3	2	11
父大臣・入道	0	6	0	1	0	7
宰相中将	4	1	0	1	0	6
対の君	2	0	0	0	0	2
石山の姫君	0	3	0	0	0	3
少将	0	2	0	0	0	2
大君	0	2	0	0	0	2
みな	0	2	0	0	0	2
尼君	0	0	0	2	0	2
その他	0	4	1	3	2	10
計	9	26	4	13	8	60

【表2】「泣く泣く」用例数

	巻1	巻2	巻3	巻4	巻5	計
男君(中納言)	1	2	0	1	3	7
父大臣・入道	1	3	0	1	1	6
女君(中の君)	0	0	0	0	4	4
その他	1	3	1	0	1	6
計	3	8	1	2	9	23

(70)

【表3】「涙」用例数

	巻1	巻2	巻3	巻4	巻5	計
男君（中納言）	14	5	0	10	6	35
女君（中の君）	6	6	4	5	2	23
帝	0	0	4	1	0	5
父大臣・入道	0	1	0	0	2	3
対の君	3	0	0	0	0	3
大君	0	2	0	0	0	2
男君と女君	1	0	1	0	0	2
その他	1	4	1	0	3	9
計	25	18	10	16	13	82

(注) 巻1、大系本108ページの和歌中の「涙」はうぐいすの涙であるが、掛詞であるため、男君の心中と判断し男君に分類した。

【表4】「涙ぐむ」用例数

	巻1	巻2	巻3	巻4	巻5	計
男君（中納言）	3	1	1	0	0	5
女君（中の君）	0	0	0	1	2	3
石山の姫君	0	0	0	0	2	2
その他	1	0	0	1	0	2
計	4	1	1	2	4	12

【表5】「涙ぐまし」用例数

	巻1	巻2	巻3	巻4	巻5	計
男君（中納言）	2	2	0	0	0	4
女君（中の君）	0	0	1	1	0	2
宰相中将	0	1	0	0	0	1
計	2	3	1	1	0	7

【表6】「泣く」「涙」の類義語用例数

	巻1	巻2	巻3	巻4	巻5	計
泣きみ笑ひみ （名詞）	1 （男君）	0	0	0	1 （男君と女君）	2
泣きみ （名詞）	0	0	0	1 （男君）	0	1
喜び泣き （名詞）	0	0	0	2 （男君/家中の人々）	0	2
泣き笑ふ	0	1 （男君と大君）	0	0	0	1
涙ぐましげ	1 （少将と小弁）	0	0	0	0	1

【表7】 男君の涙表現 その原因と対象（「泣く」「泣く泣く」「涙」「涙ぐむ」その他類義語、すべて含む）

	巻1				小計	巻2					小計	巻1巻2合計
	女君	対の君	これまでの事情	女君と自分の運命		女君	大君	石山の姫君	現状	女君と自分の運命		
①思慕 a	5	0	0	0	5	0	0	0	0	0	0	5
思慕 b	2	0	0	0	2	3	0	0	0	0	3	5
②心配	2	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	2
③苦悩	6	0	0	1	7	1	2	0	0	1	4	11
④悲哀・悲嘆	3	1	0	0	4	3	0	1	2	1	7	11
⑤喜び	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1
⑥後悔	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1
⑦同情	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1
その他	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1
計	18	1	1	1	21	10	2	1	2	2	17	38

	巻3		巻4							小計	巻5					巻3～5合計	総計	
	宣旨の言葉	小計	女君	女一の宮	帝	物の怪の言葉	生霊の存在	女君と女一の宮	自分の気持ち		※	女君	宿世	家族の存在	女君との縁			その他
①思慕 a	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	3	8
思慕 b	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	6
②心配	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	2	2	0	0	0	0	2	4
③苦悩	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1	3	0	0	0	0	0	0	3
④悲哀・悲嘆	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	2	2	1	0	0	0	3	5
⑤喜び	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	2
⑥後悔	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
⑦同情	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	3
⑧安堵	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
⑨不吉	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
⑩未練	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	3	3
⑪感動	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	2	2
⑫賞讃	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1
その他	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	1	2	3	4
計	1	1	6	2	1	1	1	1	1	1	14	10	1	1	1	1	14	29
																		67

【表8】 男君の涙の原因とその表現（泣く類と涙類の比較）

	泣く類	涙類	計
①思慕 a	0	8	8
思慕 b	2	4	6
②心配	1	5	6
③苦悩	3	11	14
④悲哀・悲嘆	9	7	16
⑤喜び	2	0	2
⑥後悔	1	0	1
⑦同情	1	2	3
⑧安堵	0	1	1
⑨不吉	0	1	1
⑩未練	1	2	3
⑪感動	1	1	2
⑫賞讃	0	1	1
その他	2	1	4
計	23	44	67

【表9】 「涙」「泣く」および関連語があらわれる位置（男君の流した涙のみ）

	挿入句の前	挿入句の中	挿入句の後	歌の前	歌の中	歌の後	挿入句と挿入句の間	挿入句と歌の間	計
涙	6	1	9	2	4	1	4	2	29
涙ぐむ	2	0	0	0	0	0	1	0	3
涙ぐましげ	0	0	0	0	0	0	0	0	0
涙ぐまし	0	0	3	0	0	0	0	0	3
泣く	2	0	4	0	0	0	1	1	8
泣く泣く	3	0	1	0	1	0	1	0	6
泣きみ笑ひみ	1	0	0	0	0	0	0	0	1
泣き笑ふ	0	0	0	0	0	0	0	0	0
泣きみ	0	0	1	0	0	0	0	0	1
喜び泣き	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	14	1	18	2	5	1	7	3	51

【表10】 浜松中納言物語における、「泣く」の位置

	挿入句の後	歌の前	歌の中	歌の後	歌を聞いた他の人	計
泣く	18	1	2	10	3	34

【付記】 本稿は、2014・2015年度の日本語学演習（安部）『『夜半の寢覚』と平安和文資料の日本語語彙』の授業において、菊池そのみ（学籍番号13033043）が担当した「泣く」・「涙」に関する発表および安部の指導によるその後の追加調査をもとに構成し直したものである。「プロローグ」ほか『源氏』『浜松』との共通性に関する部分は安部が追記し、用例分類の点検なども共に行ったが、『寢覚』の考察部分は主に菊池が担当してなったものである。

参考文献

- 伊藤千夏（1984.3）「源氏物語の泣き表現 「涙落つ」と「涙落とす」をめぐって」『岡
大國文論稿』12、岡山大学
- 今泉雅代（1983.3）「平安末期物語の涙考 浜松中納言物語を中心に」『東洋大学短期大
学論集日本文学篇』19、東洋大学短期大学
- 尾崎知光（1995.3）『『更級日記』のことばと『源氏物語』『夜の寢覚』のことば』『愛知
淑徳大学国語国文』18、愛知淑徳大学
- 神谷かをる（1993.7）『『涙』のイメージ——万葉集から古今集へ——』『国語語彙史
の研究』13、和泉書院
- 小林澄子（1984.5）「古代における「涙」をめぐる動詞について」『文芸研究』106、日
本文芸研究会
- 近藤みゆき（2015.5）『王朝和歌研究の方法』笠間書院
- 阪倉篤義・高村元継・志水富夫（1974.9）『夜の寢覚総索引』、明治書院
- 沢田正子（1990.2）「蜻蛉日記の感情表現——『涙』と『泣く』の位相』『静岡英和女学
院短期大学紀要』22、静岡英和女学院短期大学
- 志水富夫（1988.12）『『夜の寢覚』の心理描写について 男主人公「中納言」の場合』『文
学研究』4、徳学園短期大学
- 鈴木貴子（2004.3）「宇治の君の〈涙〉——見られる涙の力学——』『フェリス女学院大
学日文学部紀要』11、フェリス女学院大学
- 鈴木貴子（2006.3）「〈涙〉の共有と〈ずれ〉——紫の上・光源氏関係をつなぐもの——」
『物語研究』6
- 鈴木貴子（2008.3）『『源氏物語』における〈涙〉表現——「音泣く」に秘められた力学
——』『日本文学はどこに行くのか——日本文学研究の可能性』フェリス女学院大
学
- 鈴木貴子（2011.3）『『夜の寢覚』における〈涙〉の表象——石山の姫君の「家族」——』『涙
から読み解く源氏物語』笠間書院
- 高橋由記（2004.9）「撰関家嫡子の結婚と『夜の寢覚』の男君——但馬守三女への対応
に関連して』『国語国文』73（9）、中央図書出版社

(74)

- 田村 隆 (2012.2) 「涙」の表記情報『国語国文』80
- ツベタナ・クリステワ (2001.3) 『涙の詩学』名古屋大学出版会
- 永井和子 (1990.9) 『続寝覚物語の研究』笠間書院
- 三田村雅子 (2007.9) 『『夜の寝覚』の〈衣〉と〈身体〉——『引き入る』衣空間から』『源氏物語へ 源氏物語から』笠間書院
- 中里理子 (2004.9) 「泣く」「涙」を描写するオノマトペの変遷 中古から近代にかけて『上越教育大学研究紀要』24、上越教育大学
- 福田昆之 (1985.10) 「ナミタ「涙」の語源』『言語と言語学』31
- 丸谷才一 (1983.2) 「男泣きについての文学論』『群像』38、講談社
- 宮下雅恵 (2011.5) 『夜の寝覚論——〈奉仕〉する源氏物語』青蘭社
- 安井信子 (2009.2) 「涙の効用——アメリカ文学はなぜ泣かないか』『川崎医学会誌 一般教養篇』34
- 柳田國男 (1941.6) 「洩泣史談』『柳田國男 (ちくま日本文学015)』筑摩書房
- 湯本なぎさ (1994.2) 『『源氏物語』における「涙」をめぐる表現について』『共立女子大学文芸学部紀38、共立女子大学
- 湯本なぎさ (1994.2) 「光源氏の涙——その精神の成長段階をめぐる——』『共立女子大学文芸学部紀要40、共立女子大学
- 米田明美 (2008.3) 『『夜の寝覚』の新出和歌から 男君の夢と物語の構造』『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』44、甲南女子大学図書・メディア委員会
- 盧 亨美 (2001.3) 『『源氏物語』における「涙」の性差について』『日本女子大学大学院文学研究科紀要』7、日本女子大学大学院